九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ドイツ民主共和国における「開かれた活動」の史的研究

村上，悠

https://hdl.handle.net/2324/2236011

出版情報：Kyushu University, 2018, 博士（法学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

（様式６－２）

氏　　名	村上　悠
論　文　名	ドイツ民主共和国における「開かれた活動」の史的研究
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　熊野　直樹 副　査　　九州大学　　教授　　木村　俊道 副　査　　九州大学　　准教授　蓮見　二郎

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本稿は、ドイツ民主共和国（以下、東独と略記）における「反対派」の源泉として研究上みなされてきた教会の青年活動である「開かれた活動」の 1968 年から 89 年までの展開過程を、出国運動との関係について注目しながら、体制批判運動の中で位置づけ直した政治社会史研究である。本稿では、イェナ、ライプツィヒ、ベルリンにおける「開かれた活動」とそれらと人的連続性を持つグループについて取り上げて、緻密に実証研究がなされている。

「はじめに」では、本稿の課題が示されるとともに、本稿に関連する先行研究の整理が網羅的かつ綿密になされている。そのうえで本稿の研究史上の位置づけが明確に示されている。また、本稿で依拠する厖大な量の未刊行史料を始めとした史料的基盤の説明とともに、本稿の構成が簡潔明瞭に提示されている。

第 1 章「東ドイツの教会政策及び青年政策」では、「開かれた活動」が開始された 1968 年までの東独の福音教会及び活動の主な参加者となる東独青年の置かれていた状況についての整理がなされている。その際、東独政府が社会主義の達成という目標に向けて、教会と青年に対していかなる政策方針をとっていたかについての確認がなされている。

第 2 章「『開かれた活動』の成立」では、テューリンゲン地方において「開かれた活動」が開催されるに至る経緯について多くの未刊行史料に基づいて明らかにされている。東独において教会は体制から抑圧を受けていたが、教会の底辺部に位置する各都市の牧師は独自に運動を展開していた。また東独の青年は、「ベルリンの壁」建設後一時的にとられた寛容な文化政策の後に再び強硬路線への回帰を体験し、体制に大きな不満を抱くことになる。こうした青年の活動の場が、教会内部で「開かれた活動」として形成され、東独各地に拡散する過程が興味深く詳細に描かれている。

第 3 章「イェナの『開かれた活動』の変遷」では、イェナにおける「開かれた活動」の展開過程を、1970 年から活動を開始し、中心的な役割を果たしていた「ユンゲ・ゲマインデ・シュタットミッテ」の活動を中心に緻密な検討がなされる。イェナは伝統的な大学都市であり、「開かれた活動」が始まった小村ブラウンスドルフと地理的に近く、「ユンゲ・ゲマインデ・シュタットミッテ」もまたブラウンスドルフにおける W・シリングの活動の影響を受けていた。1970 年代から 80 年代前半にかけての積極的な活動の結果として、「ユンゲ・ゲマインデ・シュタットミッテ」の活動領域が体制側からの圧力によって制限され、中心的メンバーの多くを喪失していった過程が明らかにされる。

第 4 章「ライプツィヒの『平和の祈り』の成立と拡大」では、同地における「開かれた活動」の展開が検討されている。ここでも早い時期から「開かれた活動」が展開されており、1989 年秋の「月曜デモ」の基盤となった「平和の祈り」と呼ばれる集会もまた展開されていた。これに「開かれた活動」もまた統合されることになる。本章では「開かれた活動」から「平和の祈り」を経て、89 年の「月曜デモ」の土台が築かれる過程について厳密な史料批判に基づいて検討がなされている。

第 5 章「ベルリンの『開かれた活動』から『下からの教会』へ」では、ベルリンにおける「開かれた活動」の展開について検討がなされている。ベルリンにおける「開かれた活動」は、1970 年代後半から本格的に開始されていた。80 年代後半に当地で成立した「下からの教会」は「開かれた活動」と深く関わっていた。本章では、ベルリンの「開かれた活動」が「下からの教会」へと至る過程が実証的に明らかにされている。

第 6 章「1989 年転換期における『開かれた活動』」では、それまでの各都市の「開かれた活動」の事例研究を踏まえて、1989 年転換期における「開かれた活動」の諸相についての実証的検討と類型化がなされる。本章では、「開かれた活動」の展開をそれぞれ「活動サークル連帯教会テューリンゲン地域グループ」、「平和の祈り」、「下からの教会」を主体として考察がなされている。これらの活動は 89 年秋に登場した市民運動グループの支援を行っていた事実が明らかにされている。

「おわりに」では、以上の実証的な検討を踏まえたうえで、「開かれた活動」は「異なる考えを持つ人々」との対話が社会の発展を促進するという「発想」を一貫して有していたことが指摘される。この「発想」をもとに、政府が貫徹を目指す社会主義のイデオロギーとは「異なる考えを持つ人々」が集まることができる空間が創出されたとされる。「開かれた活動」の展開はイェナ、ライプツィヒ、ベルリンとそれぞれ異なるパターンが見られるが、一貫して東独社会において「異なる考えを持つ人々」を許容する空間を提供し続けていたことが強調される。以上の意味で「開かれた活動」は東独国内の体制批判運動を支援し続けていた点が指摘されている。

以上が本稿の要約であるが、本稿では当該研究分野に関連する日本内外の研究文献が網羅的かつ緻密に整理されている。しかも先行研究の問題点が適確に指摘され、問題設定も説得的になされている。本稿が有意義で独自性を有する研究であることが、研究史の丁寧な整理、詳細な検討、正鵠を射た批判を通じて論証されている。

本稿のさらなる特長として、広範囲にわたる充実した史料的基盤を挙げることができる。特に国内外においてあまり利用されてこなかった未刊行史料、特に日本では全く利用されてこなかった現地の地方の文書館において数多くの史料が発掘され、そこから重要な史実が数多く明らかにされ、「開かれた活動」の実態が解明されている。また従来ブラックボックスであった教会内の諸対立を史料によって明らかにした点も、歴史研究としての重要な貢献である。

本稿の研究史上の最大の意義は、「開かれた活動」の歴史的起源を探り、そこから 1989 年秋の東独の民主化運動との連続性と非連続性を史料的に明らかにした点である。さらに各都市の「開かれた活動」のグループ間のつながりを解明し、「発想、組織、人員」といった観点からそれらを類型化し、それぞれの特徴を提示した点も重要である。その際、各都市の「開かれた活動」の共通点として「異なる考えの人々との対話」の呼びかけという点を指摘し、それが「開かれた活動」の成立以来一貫して連続している点を実証した点は、本稿の特筆すべき研究成果として高く評価できよう。

一方で、本稿の課題として指摘できるのは、分析概念のさらなる精緻化である。例えば 3 つの都市を事例として分析する際に、「開かれた活動」の「発想、組織、人員」という分析視角が提示されているが、この用語の一層の整理が必要である。また「開かれた活動」の「異なる考えの人々との対話」といった「発想」の思想史的ないしは理念史的掘り下げが必要である。さらには本稿のテーゼを東独の政治社会史や体制批判運動史の研究の中で位置づけ直す作業も課題として残されている。

しかし、これらはいずれも今後の研究上の課題に属するものであり、本稿の論旨や論証に直接関わるものではなく、本稿の博士論文としての価値を決して減ずるものではない。

以上より、本学位申請論文は、調査委員全員一致して、博士（法学）の学位を授与されるに値すると認定する。